

イギリスのGCSE試験における「統制評価」の導入について : 地理歴史科に焦点を当てて

飯田, 直弘
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7376517>

出版情報 : 国際教育文化研究. 9, pp.73-82, 2009-07-07. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



イギリスの GCSE 試験における「統制評価」の導入について

—地理歴史科に焦点を当てて—

飯田 直弘

1. はじめに

本稿の目的は、2009 年より導入されることとなった「統制評価 (controlled assessment)」¹ について、その導入背景を明らかにし、また従来のコースワーク評価と具体的にどのような点が異なるのかについて、明らかにすることである。

イギリス²では、1986 年に 16 歳の生徒が受験する GCSE (General Certificate of Secondary Education) 試験が導入された。そこでは、2 年間のコースの終わりに実施される筆記試験とともに、コースワーク評価 (coursework assessment) とよばれる評価方法が採り入れられた。この評価方法は、実験に関わる技術、調査の遂行能力、知識と理解の日常生活への応用力などの実際の・実用的能力を評価するものであり、筆記試験の点数と合わせた形で最終的な成績が出される。また、課題の設定と評価は主に学校の教師によって行われ、この意味で内部評価の特徴を強くもつ。このように、実際の・実用的側面をすべての者にとって重要な要素とし、さらに、それを評価する方法として内部評価を用いたことは、この新しい試験の特性を左右する重大な特徴であるといえる。

しかし、近年になって、以上のような GCSE 試験とコースワーク評価に対して、見直しが図られることとなった。その結果、コースワーク評価に替わって「統制評価」とよばれる評価方法の導入が決定された。この評価方法は、コースワーク評価と同様に最終的な筆記試験とは別に行われるものであるが、課題の設定、課題の実行、課題の採点という 3 つの評価プロセスにおいて、資格付与団体などが外部からの「統制」を行うことを特徴とする評価方法である。

本稿では、まず、この新しい評価方法がどのような背景で導入されたのかについて、白書や「統制評価」に関連する資格カリキュラム当局の文書、コースワーク評価の再検討に関する報告書を分析することにより明らかにする。次に、コースワーク評価と「統制評価」の理念や内容について、具体的にどのような点で異なるものなのかについて、先行研究や最新の資料をもとに検討する。さらに、実際の試験のシラバス (specifications) によってこの「統制評価」の内容や「統制」のレベルが規定されているが、本稿では特に地理歴史科 (GCSE における「地理」と「歴史」の科目) に焦点を当て、具体的にこれらの内容についてみていくこととする。最後に、この評価の予測される問題点とその主要な論点について検討する。

試験の特性はその評価方法に大きく依存すると考えられ、それゆえこのような評価方法にお

ける重大な変化がみられた場合、その動向について精査することは試験の構造を理解する上で有益であるだろう。

2. 「統制評価」の導入背景

2-1 GCSE の改革の論点

「統制評価」の直接的な導入背景についてみる前に、まずその評価方法が導入されることとなった資格試験である GCSE に関する改革の論点について明らかにする。以下では、GCSE が改訂されるに至った経緯について概説し、そこでの論点について整理する。

GCSE の改革と新しい評価の開発に着手する直接的な契機となったものとして、2005 年に政府が発行した白書「14 歳から 19 歳の教育とスキル」(2005) が挙げられる。この文書は、教育と訓練の水準を向上させるための教育改革において重要な要素である資格制度の改革について言及しており、そのなかで GCSE の改革についてもいくつかの提言がなされている。そこでの主要な論点は、以下のとおりである³。

- 基礎的なスキルを向上させるために、特に英語と数学の改革を行う。また、数学については、上級レベルへの発展を促進する。
- 生徒が十分な選択の機会を得られるようにするために、各レベル（年齢段階）の資格試験間の一貫性を重視する。

これら 2 つの要素は、雇用者が満足するスキルの育成、そして 16 以後の段階に残る生徒の数を増やすという、教育と訓練に関する課題の達成において重要な要素だと考えられる。このような GCSE の改革に伴って、コースワーク評価の問題についても指摘されている。まず、評価方法の改革を行う意義に関連して、「評価の削減」の項目において以下のような提言がなされている。

上級レベルへと加速することをとおして、力を出し切るための機会を若者に与えることは、彼らが全体で受ける試験の数を削減することになるかもしれない。さらに、我々は、……コースワークの負担を軽減するための余地が存在すると考えている。⁴

以上の文脈から、コースワーク評価の改革は、試験の負担を軽減することに関連しており、生徒に(16 歳以後の)上級レベルへの発展の機会を与えるという目的をもっていることがわかる。また、このようなコースワーク評価の改革は、先述の国家の教育と訓練の水準を向上させるというマクロな目標につながるものである。

さらに、ここで指摘されている具体的な問題点には、以下のようなものが挙げられる⁵。

- 14 歳から 19 歳の改革に関するワーキング・グループがあまりにも頻繁であると指摘したように、生徒はいくつかの科目にわたって同じようなコースワークを完成させなければな

らない。この点に関して、コースワークの負担を軽減させる必要がある。特に、コースワークによって評価される知識とスキルが信頼できる別の手段で評価することが可能である場合、コースワークの負担を軽減させることを視野に入れる。

- ここでの3つの主要な関心事は、次のとおりである。第1に、類似した科目におけるコースワークへのアプローチを一貫したものとし、最終的な筆記試験では評価できないようなスキルや特質をテストすることを確かなものにする。第2に、公正に関する懸念に取り組む必要がある。第3に、累積的なコースワークの負担を軽減する。

このような文脈で、GCSEの改革、そしてそれに伴って評価方法の再検討がなされることとなった。次節では、この評価方法を再検討した文書を中心に、コースワーク評価の具体的な問題点について明らかにする。

2-2 従来の評価に関する問題点

資格カリキュラム当局によれば、「統制評価」の導入は、「近年のコースワークの再検討によって提起された問題に取り組むために意図されたものである」⁶としている。そのため、ここでは「統制評価」の直接的な導入背景として、コースワーク評価の問題点について明らかにする。資格カリキュラム当局が発行しているコースワーク評価の問題点について議論した文書には、『GCEとGCSEにおけるコースワークの取り決めの再検討』（2005）と『GCSEにおけるコースワークの再検討』（2006）がある⁷。これらの文書は、上述の2005年の白書において提言された内容を受け、コースワーク評価の再検討を行ったものである。ここでは特に前者について、その論点を以下にまとめた⁸。

- 課題は実際の受験者によって達成されたものでなければならない。すなわち、インターネットを利用した剽窃などを発見・防止する必要がある。
- 教師や親による支援がどの程度可能なのかに関する明確なガイドラインが欠如している。
- 何が不正行為なのかに関する教師と学校の知識と理解が欠如している。
- 学校における採点の標準化が必要であり、また、学校間での採点の標準化は明確ではなく、一貫したものとなっていない。
- 調整官（moderator）による学校へのフィードバックの目的とフォーマットが明確ではない。
- 科目によってはコースワークに対しての不安が存在する。そのため、科目ごとにコースワーク評価の比重と価値について評価を行う必要がある。

つまり、課題の達成や採点のプロセスにおいて個々の学校、教師もしくは生徒の裁量によるところが大きいという点が問題視されている。

さらに、GCSEにおける「統制評価」の規則について言及している文書によれば、コースワーク評価で指摘された問題は、課題の設定、課題の実行、課題の採点という3つの側面に関連

するとしている。それらの3つの側面と取り組むべき重要な課題については、表1に示したとおりである。

表1：コースワーク評価における問題点

プロセス	取り組むべき重要な問題
課題の設定	評価をより妥当で信頼できるものにする 評価が型にはまっており目新しさがないものにならないようにする 質の高い教授と学習を支援する 評価を生徒と教師にとってより管理しやすいものにする
課題の実行	評価における不正行為を防ぎ、またそれを発見する 教師が自信をもって生徒の作業が有効であることを証明する 評価を生徒と教師にとってより管理しやすいものにする
課題の採点	最高の質の評価判断を保証する

出所：Qualifications and Curriculum Authority (2007), p. 3.

以上に、従来のコースワーク評価の問題点について述べてきたが、そのなかでも最も重大な点は、コースワーク評価の各プロセスにおいて、学校間、教師間、もしくは生徒間で一貫した基準が必ずしも存在せず、そのため、評価の妥当性と信頼性に問題がある、というものである。

以下では、このような導入背景を踏まえた上で、「統制評価」の特徴について、コースワーク評価と比較しながらみていく。

3. コースワーク評価と「統制評価」の比較

3-1 理念／評価の対象となる能力・スキル

コースワーク評価の主要な理念と評価の対象となる知識・スキルに関して、楠井（1994）は以下のようにまとめている⁹。

- 「コースワークの採用という事実には、あらゆる生徒の（原文のまま）『実用化する』能力を高めることにある」（p. 9）。この「実用化する」能力には、実験機材の適切な運用、フィールドワークにおける調査技術、会話能力、実際生活における問題への数学の応用、など科目の特性に応じた幅広い能力が含まれる。
- コースワークは、正規の試験では実力の出せない生徒に対して公平な取り扱いができる。
- 幅広い生徒の必要に応じた課題を設定することができ、さらにコースを通じての学習が価値のあるものであると生徒に認識させる。

一方で、「統制評価」の理念や評価の対象となる知識・スキルについては、先述したコースワーク評価を再検討した2つの文書とそれらに引き続く形で出された、『GCSEの改善：内部評価と「統制評価」』（2007）¹⁰において整理されている。

- (評価の各プロセスにおける)「統制」の性質が、GCSE の全科目にわたる内部評価に対する社会の信頼を強化するためのものである。¹¹
- 「英文学」、「地理」、「歴史」などの科目は、知識と理解の評価に焦点をあてた科目であり、そこでは外部試験もしくは「統制評価」がコースワークに取って代わることができると、2006 年のコースワーク評価の再検討に関する文書において提言され、議論を引き起こした。その一方で『GCSE の改善：内部評価と「統制評価」』(2007) は、内部評価／「統制評価」が適切だとされる能力として、調査遂行能力、説明や分析のための知識・理解の応用、現実の問題への知識・理解の応用、実際の課題と ICT に基づく課題に取り組む能力などを挙げ、上述の科目における内部評価(「統制評価」)の重要性について述べている。¹²
- 「美術とデザイン」、「演劇」、「音楽」、「ICT」やいくつかの職業科目では、実際的な能力もしくはパフォーマンス・スキルの側面が 2006 年の文書においても強調され、それらの最も妥当な評価方法は、(伝統的なコースワーク評価の形式を必ずしも用いない)内部評価であるとしている。¹³

上述したこれらの 2 つの評価方法の要素を比較した場合、实际的・実用的な能力を評価するための方法であることが共通している。その一方で、『GCSE の改善：内部評価と「統制評価」』において議論されている「統制」の性質が、GCSE の全科目にわたる内部評価(コースワーク評価を想定したものである)に対する社会の信頼を強化するためのものであることは、これらの 2 つの評価方法の相違点を理解する上で重要な点である。しかしながら、2006 年の文書では、「統制評価」が知識・理解を評価するための外部評価と並列して表記されていたにもかかわらず、『GCSE の改善：内部評価と「統制評価」』においては、实际的・実用的な能力が内部評価だけではなく「統制評価」においても適切に評価され、「統制評価」は内部評価にも通じるものとして記述されている点は、一見矛盾しているようにも考えられる。この点は、次節で詳細に述べる「統制」の度合いに関わる評価の構造に関連している。すなわち、「統制評価」においては、「統制」の度合いが最も弱い場合は、それは内部評価の特徴を表し、逆に「統制」の度合いが最も強い場合は、それは外部評価の特徴を表すのである。

まとめると、コースワーク評価は従来、内部評価の側面を多分に含む評価方法であったが、妥当性と信頼性の確保のため、評価の各プロセスにおいてある程度の「統制」をかける必要が生じた。そこで導入されたのが「統制評価」だといえる。

3-2 評価の構造

「統制評価」の特徴は、課題の設定、課題の実行、課題の採点の各プロセスにわたって、「統制」のレベルが設定されていることである。各プロセスにおける「統制」のレベルの多様性については、表 2 に示したとおりである。

ここで説明が必要なのは、課題の実行に関わる 5 つの要素であるだろう。第 1 に、認証の「統制」においては、教師の直接的な監督下で生徒は作業を完了する。第 2 に、フィードバックの「統制」においては、生徒へのフィードバックは、資格付与団体(もしくはレギュレーター)

によって指定された厳格なガイドラインにしたがって行われる。第3に、時間の「統制」においては、生徒は制限時間内に作業を完了する。第4に、協働の「統制」においては、生徒は個人で作業を完了する。第5に、リソースの「統制」とは、リソースへのアクセスは、資格付与団体によって指定されたものに制限される。「統制」レベルが最も高い場合、それらのすべての要素は外部によって規定される。その一方で、レベルが中もしくは低い場合、指定の範囲内で各学校・カレッジがこれらの要素に関して規定する力をもつこととなる。

表 2：課題の各プロセスにおける「統制」のレベルとその内容

	課題の設定	課題の実行	課題の採点
レベル高	課題は資格付与団体によって利用可能となり、その中から教師が選択する	認証の「統制」 フィードバックの「統制」 時間の「統制」 協働の「統制」 リソースの「統制」	資格付与団体が採点を行う
レベル中	資格付与団体のガイダンス・基準に沿って教師が課題を開発する	上記の3つか4つの「統制」の要素を含む（残りは学校が規定する）	教師が採点し、資格付与団体が調整（moderate）する
レベル低	資格付与団体による最小限のガイダンス・基準に基づき教師が課題を設定する	上記の1つか2つの「統制」の要素を含む（残りは学校が規定する）	教師は課題の採点において資格付与団体の訓練・認証を受け、資格付与団体による詳細な監査のプロセスを伴わない

出所：Qualifications and Curriculum Authority (2007), pp. 4-6 をもとに作成。

一方、コースワーク評価は、元来、教師によって課題の設定がなされ、教師によって評価されるという内部評価の形態をとり（すなわち、「統制評価」の構造でいえば、レベル中もしくは低い段階の評価といえる）、上記の「統制評価」のような、課題のプロセスと「統制」のレベルのような基準によって評価を構造的に組織するようなプロセスが欠如していたといえる。また、コースワーク評価においては、ウォーリック大学の教育開発・評価・調査センターによるコースワーク評価に関する事例調査報告によって、GCSE 導入当初のコースワーク評価について、コースワークのタイミング、場所、活動のタイプ、リソースの利用可能性、親や他者の支援に関して、学校間、学科間、教師間、地方教育当局間で多様性がみられることが明らかにされている¹⁴。この点に関連して、『GCSE の改善：内部評価と「統制評価」』においても、現在のシラバスでは、教師が内部評価の要素と外部評価の要素を選択できるようになっているという問題点も指摘されている。これらはすなわち、明確な規定が存在せず多様な現状が存在することを意味している。

「統制評価」におけるレベルの設定について、資格カリキュラム当局の資料には、「もしすべ

てのケース（課題のプロセス―訳者注）において、最も高いレベルの『統制』が選択されたならば、評価は外部評価の要件を満たすことになり、それゆえ『統制評価』とはならないだろう」¹⁵とされている。その一方で、表 2 において示されているとおり、すべてのプロセスで最も低いレベルの「統制」が選択された場合、これは内部評価の要素を多分に含んだものとなる。これはすなわち、資格付与団体による外部評価と学校の教師による内部評価のうち、前者に位置づけられる筆記試験と後者に位置づけられるコースワークとの間の存在するものが「統制評価」であることを意味する。また、資格カリキュラム当局が発行している『統制評価』（2007）によれば、特に課題の実行のプロセスにおいて、『統制』の強化は、評価に対する世間の信頼を大きく高め」とある。このように、評価のプロセスをより構造化することにより、評価の妥当性と信頼性を向上させることが、「統制評価」の特徴であるといえる。

3-3 「地理」と「歴史」における「統制評価」

本節では、3-1 で述べた「統制評価」の特徴のうち、2006 年のコースワーク評価の再検討に関する文書において、「地理」と「歴史」に関して、知識と理解の側面を重視し、最終的な筆記試験もしくは「統制評価」（全体のプロセスにおいて「統制」レベルが高いものが想定されている）がコースワークに取って代わることが提案されていた点に着目し、評価のプロセスに関連する「統制」の度合いが規定されている実際の試験のシラバスをみることにする。ここでのポイントは、これらの科目において、どの程度の「統制」が規定され、さらに最終的な筆記試験と比べて「統制評価」にどの程度の比重が割り当てられているのか、という点である。なお、ここでは 3 つの主要な資格付与団体のうち、Edexcel のシラバスに焦点をあてる。

表 3 は、2009 年の地理と歴史のシラバス（A）¹⁶にける、「統制」のレベルと、評価全体における「統制評価」の比重について示したものである。

表 3：「地理」と「歴史」の「統制評価」における「統制」レベルと比重

	「地理」	「歴史」
課題の設定	「統制」レベル高	「統制」レベル高
課題の実行	a) 調査とデータ収集：限られた「統制」 ¹⁷ b) 分析、結論、発見の評価：「統制」レベル高	「統制」レベル中 (リソース、時間、認証の「統制」)
課題の採点	「統制」レベル中	「統制」レベル中
比重	25%	25%

出所：Edexcel (2009a) p. 5, pp. 60-61 と Edexcel (2009b) p, 5 & 46 をもとに作成。

これをみれば、両方の科目ともに全体的に「統制」のレベルが高いようにみえる。しかしながら、先述したように、議論の過程でこれらの科目における「統制評価」の性質に対する異なる見解がみられた点からも、各科目の「統制」レベルの設定については、どのような学習成果を評価するのかといった点とともに、今後も議論される必要があるだろう。

なお、旧バージョンの試験基準にしたがった地理と歴史のシラバス（A）についてみた場合、地理については、コースワーク評価の比重は 25%であり¹⁸、「歴史」においては、コースワーク評価の比重は 25%である¹⁹。そのため、現在の比重は以前と変化がないといえる。

4. おわりに

以上にみてきたように、GCSE 試験は、近年見直しが図られることとなり、2009 年より漸次的に新しい課程での授業がスタートすることとなった。そこでの重要な要素として、「統制評価」の導入が挙げられる。この評価方法は、評価のプロセスにおいて「統制」のレベルを設定することにより、妥当性・信頼性の促進を図ろうとするものであり、それは以前のコースワーク評価における関連した問題点に対応するためのものであった。

その一方で、この新しい評価の問題点・ジレンマとしては、次のようなものが挙げられるだろう。

- 評価プロセスの構造がより明確になったことにより、逆に、GCSE 伝統科目（アカデミック科目）と GCSE 職業科目の間、もしくは外部評価が適切だとされた科目とそうでない科目の間で、社会的評価のギャップを生むか、もしくはそれを増大させる可能性がある。この点は、コースワーク評価の改革に関する部分でも言及した、評価の妥当性と信頼性の問題に関連している。
- 評価の「統制」を強化した場合、評価（もしくは試験）の妥当性・信頼性が向上する反面、生徒や教師は厳格で規定的なプロセスを経なければならず、場合によっては教師や生徒の負担が増大するというジレンマが存在すると考えられる。そのため、各科目の特性にあわせた、適切な比重の設定が必要となる。これは、コースワーク評価の問題点の一つとして、生徒の負担について言及されていた点を考慮すれば、非常に重要な事項である。
- 元来コースワーク評価が評価の対象とした「実用化する能力」（もしくは実際的能力）は、「統制評価」においても重要視されているが、課題のプロセスにおいて比較的「統制」が強かった場合、評価は従来の外部筆記試験の様相を呈し、そのような能力を適切に評価することが可能なのかという疑問が引き起こされる。ここでも、妥当性と信頼性の確保とのジレンマが存在する。ここでのポイントは、各科目でどの程度の「統制」を行うのが最もバランスがよいのか、について継続的に議論する必要があるという点である。

評価の側面は、資格試験の特徴に大きく影響すると考えられ、16 歳時のすべての生徒が取得を目指す GCSE においては、この評価方法における変化が、他の年齢段階の資格試験、同水準にある他の資格試験に与える影響についても、今後十分に検討していく必要があると考えられ

る。また、イギリスの教育の歴史において、「統制評価」の概念に類似したものが存在する。GCSE 試験が導入される以前に存在した試験のモード（Ⅰ～Ⅲ）の経験について再検討することは、これらの一連の評価の改革にとって有益な示唆を与え得るだろう。

[注]

¹ 本稿では、“controlled assessment”という用語は、原文で引用符が用いられてなくとも、統一して、「統制評価」のように括弧を付している。また、この文脈で用いられる「統制」(control(s))という用語についても、括弧を付した。

² 本稿では、イングランドを指す。

³ Department for Education and Skills (2005) *14-19 Education and Skills*, The Stationery Office, pp. 60-65.

⁴ Ibid., p. 62.

⁵ Ibid., pp. 62-63.

⁶ Qualifications and Curriculum Authority (2007) *Controlled Assessment*, p. 3, available on the following website (2009. 05. 22).

http://www.ofqual.gov.uk/files/qca-07-3208_controlledassessmentfinal3.pdf#search='QCA/07/3208'

⁷ Qualifications and Curriculum Authority (2005) *A Review of GCE and GCSE coursework assessments*, available on the following website (2009. 05. 22).

http://www.qca.org.uk/qca_4195.aspx

Qualifications and Curriculum Authority (2006) *A Review GCSE coursework*, available on the following website (2009. 05. 22).

<http://www.qca.org.uk/libraryAssets/media/20-06-2006-letter.pdf>

⁸ Qualifications and Curriculum Authority (2005), op. cit., p. 5.

⁹ 楠井裕茂 (1994) 「現代イギリスの試験制度について (その 2) —GCSE 試験制度の成立過程を中心に—」『神戸大学大学院教育学研究科教育課程論・計画論研究室研究論叢』第 2 号、pp. 7-9.

¹⁰ Colwill, I. (2007) *Improving GCSE: Internal and Controlled Assessment*, available on the following website (2009. 06. 01).

<http://www.ofqual.gov.uk/435.aspx>

¹¹ Ibid., p. 4.

¹² Ibid., p. 6.

¹³ Ibid., pp. 6-7.

¹⁴ Scott, D. (1990) *Coursework and Coursework Assessment in the GCSE (CEDAR Reports 6)*, the University of Warwick, p. iv.

¹⁵ Qualifications and Curriculum Authority (2007), op. cit., p. 4.

¹⁶ Edexcel (2009a) *Edexcel GCSE in Geography A (2GA01)*, Edexcel. and Edexcel (2009b) *Edexcel GCSE in History A (The Making of the Modern World) (2HA01)*, Edexcel.

¹⁷ このシラバスにおいては、“limited control”と表記されているが、表 2 でみた「統制」レベル低を指すものである。

¹⁸ Edexcel (2000) *Edexcel GCSE in Geography A (1302)*, Edexcel Foundation, p. 2.

¹⁹ Edexcel (2000) *Edexcel GCSE in History A (Modern European & World History) (1334)*, Edexcel Foundation, p. 3.

A Study of the Introduction of “Controlled Assessment” into the GCSE in England: Focusing on Geography and History

Naohiro IIDA

This paper explains the policy background of the introduction of “controlled assessment” into the GCSE examination in England, and examines the differences of characteristics between “controlled assessment” and coursework assessment.

In 1986, the GCSE examination was newly introduced with its distinctive assessment called coursework assessment. This assessment was designed to assess students’ practical skills, including skills to operate experimental instruments and materials, to prepare and conduct a research, and to apply understanding and knowledge to real life context. The final grade will be determined with both paper exam and coursework assessment results.

In recent years, following some review of GCSE coursework assessment, a new method of assessment has been devised. It’s named “controlled assessment”. This new assessment will controls the extent to which the processes of assessment—task setting, task taking and task marking—should be managed by external organization (awarding bodies).

Firstly this paper will explain the policy background of the introduction of “controlled assessment”, referring 2005 government’s white paper and other materials produced by Qualifications and Curriculum Authority. Secondly, the differences of characteristics between coursework assessment and “controlled assessment” will be examined, using syllabus data focusing on geography and history subjects.

Finally, possible problems of this new assessment will be pointed out.